

「ペットといたい」「見守る地域

高齢になると、入院など健康上の理由で、動物の世話が難しくなることもある。「ペットと一緒に過ごしたい」との思いが強い高齢者にとって、ペットと別れたくないために健康状態が悪化したり、入院などを拒絶したりすることもあるという。ペットと共に生活する高齢者の生活を支える活動が広がっている。

(阿部明霞)

飼育支援 一時預かりも

「体調は大丈夫？ ちょっと散歩させてようか」
兵庫県尼崎市で愛犬の風太と暮らす坂本昌子さん(76)宅を訪ねる女性の姿があった。
高齢者とペットが安心して過ごせるように訪問しているボランティアだ。足の調子が悪い坂本さんの代わりに風太を散歩させたり、獣医師への通院などの相談

に依りたりしている。この活動は、NPO法人「C・O・N」(尼崎市)が取り組む「高齢者とペットの安心プロジェクト」の一環だ。坂本さんが外出中に転倒し、入院したのは昨年のことだった。病院に「家に犬を残している」と伝えると、連絡を受けたC・O・Nのボランティアが風太を一緒に預かることになった。

非常時に備え 定期訪問

京都市内では高齢者の飼育主の死亡や施設入居など、非常時にペットが孤立するという課題に取り組み民間企業がある。猫の保護活動などをしている会社「ねこから目線」だ。
愛猫がいる高齢者を同社のヘルパーが有料で定期的に訪問し、必要に応じてペット用品の買い出しや、ケージの掃除などで、飼い主に代わって猫の世話を支援する。定期訪問は愛猫がヘルパーに慣れてもらう目的があるほか、猫の性格や病歴などを把握し、譲渡が必要になった時に役立てるといふ狙いもあるという。

2匹の猫を飼う黒井久代さん(70)は、サービスを利用することについて、「いざという時に頼れると思う

足の具合が以前のように回復しなかったため、施設での生活を勧められたが、坂本さんは、「風太と暮らしたいから、戻りたい」との思いが強かった。そこで、C・O・Nの支援を受け

て、自宅で風太と生活する方法を選んだ。坂本さんは「風太がいるから規則正しい生活をしようと思える。ボランティアに助けてもらい、風太と過ごさせて本当に幸せです」と話す。

ペットは、在宅時間が長くなりながら高齢者の生活にハリを与え、生きがいとなりうる。しかし加齢などにより適切な飼育ができなくなれば、増えすぎて管理できない「多頭飼育崩壊」も招きかねない。飼い主の施設入居や死亡などにより、ペットが自宅に取り残されていると、ケアマネジ

ヤーから引き取りを求められる場合もある。C・O・Nは、こうした高齢者のペットに関する困り事に対応するため、相談窓口を設置し、適正飼育の助言やペット用品の買い物などの支援で飼い主とペット双方の見守りを行っている。入院時などの一時預かりも行っほか、飼えなくなった時の引き取り先を探す

といった支援にも取り組む。今後は、行き場をなくしたペットを引き取るような中小規模のシェルターの整備を目指している。三田一三理事長(86)は「高齢者はペット管理の問題を解決できれば、地域に安心して長く暮らせる。飼い主とペット双方にとって良い支援をしていきたい」と語る。

ている。

京都市医療衛生企画課によると、近年の犬猫の引き取り理由に「飼い主の体調不良・死亡」が多くなっているという。そこで同市は、同社のような企業活動を活用して課題解決に取り組んでいる。

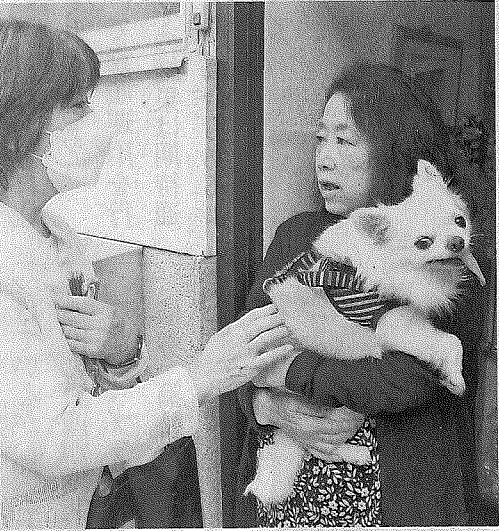
また、猫を飼いたい高齢者に、提携するシェルターから保護猫をマッチングし、譲渡を支援するサービスマも用意している。譲渡後に飼育が困難になった場合には、譲渡元のシェルターが、再び引き取ることを保証する仕組みで、猫の行き場がなくなるようにしない。だ」と意気込んでいる。

ペットが健康に与える影響について、調査・研究を担当した国立環境研究所の谷口優主任研究員は「特に犬の飼育で、規則正しい生活や散歩などの運動習慣ができ、それによって社会的交流が生まれやすいことが考えられる」と説明する。ただ、一般社団法人「ペットフード協会」の調査では、飼い犬、飼い猫の平均寿命はそれぞれ14.8歳、15.6歳で、長寿化する傾向にある。高齢になって飼い始めた場合、入院や施設入居などの局面で、ペットが自宅で取り残されてしまい、飼育責任を果たせない可能性もある。谷口さんは「安心してペットを飼うためには、飼い主だけでなく、家族や地域社会単位で責任をもってペットと共生できる環境づくりが必要だ」と指摘する。

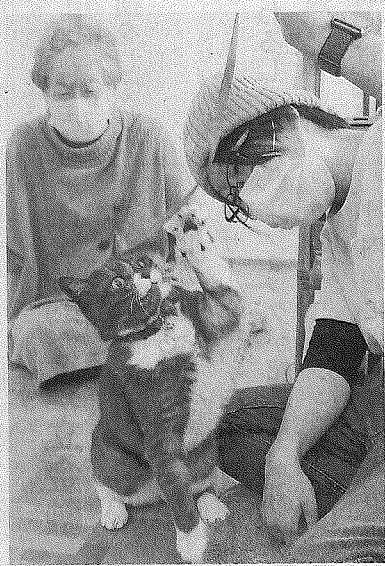
犬を飼った人 介護リスク半減

東京都健康長寿医療センター調査

高齢者のペット飼育には健康面にプラスの影響があるとする研究成果がある。東京都健康長寿医療センターが、犬を飼育したことがない高齢者と、飼育している高齢者の3年半の健康状態を調査・比較した。すると、飼育していない高齢者の要介護や死亡のリスクを1とした場合、飼育している高齢者のリスクは0.54と半分程度だったという。さらに別の研究では、ペットを飼育している高齢者は、飼っていない人に比べ、介護費が少なくなる傾向も確認された



ボランティアが定期的に坂本さん(右)宅を訪れ、愛犬を散歩させたり、困り事相談などに依りたりしている(兵庫県尼崎市で)



黒井さん(左)に愛猫の普段の様子などを尋ねながら、慣れてもらうために遊ぶ小池さん(京都市で)